

# 真清居士・鈴木馬左也の禅的人間像と生涯

## ——臨濟居士禅の事例考察——

松 本 皓 一

本稿は、先に発表した「北条時敬における人間と禅」に関する臨濟居士禅の事例研究の一つである。<sup>(1)</sup> 目的は、臨濟禅の学問的究明にあるのではなく、人間が宗教と出逢ったとき、いかなる生き方をするのか、という点を明らかにすることである。したがってここで臨濟禅が取りあげられたのは、或る一者・鈴木馬左也がたまたま出逢ったところの宗教ということに外ならない。しかし、宗教的自己実現という観点から、人間と宗教との関係をみるとき、偶然にもしばしば臨濟禅の居士たちが事例研究の対象として浮揚してくる。すでに述べた廓堂居士や大拙あるいは寸心居士がそうであり、また見水・山本良吉のばあいもそうであった。また本稿の中でも取りあげられる政・財界人の<sup>(2)</sup>いわゆる名士のなかにも、その青壮年のころ、臨濟禅の門を叩いたものが少くない。明治初期の変動の時代において、禅のもつ修養としての宗教的機能が、時代の青年にいかにか受容されたかについては、すでに別の所で

述べたが、要するに本稿で取りあげた鈴木馬左也<sup>(3)</sup>も、そうした一群のなかのひとりなのである。したがって鈴木馬左也は、単にひとりの人間としてでなく、同時代文化との脈絡のなかで、このような一群の人びととの関わりにおいて比較考察されるべきものである。しかし今回は、事例研究のモノグラフにとどめて、総合的な比較考察は更に将来へ残したい。

### 一、鈴木馬左也の人となり

鈴木は文久元年（一八六一）二月二十四日、宮崎県児湯郡の旧高鍋藩三万石の家老水筑小一郎種節<sup>たねよ</sup>の四男として生まれ、幼名犢郎と言ったが、のち母方の実家・鈴木家の養子となり、馬左也と称した。彼の居士号真清は、Ma sayaの音を漢字にうつしかえたものである。母の久子は同藩総奉行の鈴木百助の長女であるが、馬左也が嗣いだ鈴木家での養父は、藩校明倫堂教授の儒者日高明実の次男・衡房<sup>もり</sup>来助で安井息軒門

下の秀才として知られ、牧山と号した。その人物を見こまれて鈴木家に迎えられたが、来助は国事に奔走し、後述するように戊辰の役では有栖川宮の輩下に入って東北に転戦し、庄内藩との戦いで戦死した。二十七歳である。このとき馬左也は、実母の死のときと同様に八歳である。鈴木家に入ってからの馬左也は、百助の養子として先に死んだ彦作の未亡人柚子（高鍋藩の名門武藤家の出）によって養育された。馬左也は、柚子を実母の如く慕い、柚子が大正六年八十三歳で没するまで孝養の態度は少しも変らなかつたと伝えられる。

ところで馬左也の生まれた児湯郡の高鍋の地は、ほぼ宮崎県の中部にあつて、小丸川おまるの河口に位置する洪積台地の聚落である。ここに藩主秋月氏三万石の城下町が十六世紀末以来続いてきたが、閉鎖的な小藩であるため藩内の人間関係に、家の格式に応じたかなり濃厚な血の交錯が見られる。

たとえば、馬左也の生家である水筑家は、代々家老職にあり、二百石を受けて藩政とくに財政再建に当ってきた。もともと水筑家は藩主秋月家の一門であり、馬左也の父・種節自身も維新後は秋月姓に復帰している。また水筑と鈴木両家の関係も、系譜上密接なつながりを指摘することができる。たとえば馬左也から遡って二代前の水筑（秋月）の家系に見える翔房（百助）は、水筑長治と鈴木照房の女との間に生まれているが、同人はまた照房の孫娘と結婚して、馬左也の生母久子

の父となっている。その久子の生家を馬左也が嗣いでいるわけである。恐らくこれは、地方小藩という限られた条件のなかで、自らのソーシヤル・ステイタスを守ろうとする血の防衛機制のあらわれであるかも知れないが、このイエとイエとの関係、ヒトとヒトとの結合が、維新前後の緊張した歴史的状况を背景として、異常なまでに主家秋月家を中心とした団結を意識させているのである。

馬左也の伝記中に引用されてある次の一文は、よくその消息を語つていよう。

私共儀、現今は他姓を冒し罷りあり候へども、もと秋月種節の同族にて、即ち恐れ多くも大藏氏（註秋月家先祖）の御苗裔に列し候故、是までの御奉公も他人に劣らず、別して励精仕り候心得に御座候処、大政維新にて辱けなくも私共まで、率土の臣と相成り此節に至り候ては、御家へ随従さへも仕り難き儀に御座候。さりながら数百世の鴻恩豈一朝に遺忘仕るけんや。伏して願くは今後朝廷に差し次ぎ御用向き相勤め、涓埃の報効仕り度存じ奉り候。略

これは、十一歳であつた馬左也（当時犢郎）が叔父提長ながあきと共に、廃藩置県が実施されるに当って、旧と変らぬ主家への忠誠を文書をもって披瀝したものである。ここには、維新の変革期にはいても「御苗裔に列し候故」という名門意識を払拭しきれないでいる。

この名門意識の使命感から、彼ら一族は藩政や国事に奔走

したのである。馬左也の父は、のちに醸造業を始めて酒や酢を製造販売し、経済運営の才覚もあったが、戊辰の役では京都留守役とし任を果し、維新以後も旧藩主家令となって仕えている。維新から明治十年の西南の役にかけて、薩摩藩との関わりの中で、高鍋藩はたえず烈しい緊張に見舞われた。馬左也の近辺からも、これらの犠牲者が出ている。上京して国事に奔走し、小伝馬町の牢につながれて、のち病死した長兄弦太郎、庄内藩との戦いで銃弾に倒れた養父来助らは、郷党から烈士として仰がれたと云われている。

馬左也がのち、内務省官吏から転進し、住友総理事として資本主義勃興期の日本産業界に尽力し、同時に住友家長に献身の奉公をするのは、このような幕末維新の政情に奔弄された地方小藩生活者の血が流れていたこととあながち無縁ではないと思われる。

また彼の一門には、代々学問を尊重する家風が強かったのも、上述した点と無縁ではない。長兄弦太郎は藩校明倫堂に学んだのち江戸に出て、安井息軒や渡辺莊虚に師事し、佩弦と号し藩侯の侍講となった。その学識人物は高く評価されたが、前述のとおり国事に奔走して捕われ、牢内で病を得、若年で没している。次兄長平は早くから同族の黒水家の養子となったが、キリスト教の洗礼を受け、養蚕その他郷土産業の発展に寄与した。長平の場合、とくに学問を身につけたとい

うことはないにしても、嘉永五年生まれの人間が早くよりキリスト教に入信したという点に、時代の尖端をゆく文化感覚を看取することができよう。

三兄の左都夫は司法省法律学校に学んでから外務省に入り、ベルギー、ドイツに留学し、のちハンガリー、オーストリアなどの大使で勤めている。左都夫は、その夫人が三島通庸の長女であり、かつ牧野伸顕夫人の姉に当っており外交官としてもフランス法学者としても、なかなか話題の豊富な人物である。彼自身、禅への造詣が深く、むしろその点で馬左也に影響を与えた人物であるが、本稿に関連する事例研究の対象として甚だ興味ぶかい人間像<sup>(6)</sup>でもある。

母方の系譜の中では、養父の来助が前述のとおり明倫堂教授日高明美の子であり、明美は豊後の広瀬淡窓の門人で耳水、安素堂と号した儒者である。来助の兄誠実も梅溪と号し、江戸で古賀謹堂に学び、明倫堂助教となった。維新後は陸軍省参謀本部編纂部に入って多くの著作を残している。

来助もまた安井息軒から漢学を、壺井芳洲に蘭学を学んで牧山と号し、高鍋藩と薩摩藩の志士の連絡に当るなど、有望な人材として注目されていた。鈴木百助は、この人物を見込んで高鍋藩総奉行の鈴木家に養子として迎えたのである。

馬左也の母久子は、この百助の女であったが、久子の実弟長<sup>ながあき</sup>発は、馬左也より十二歳の年長の叔父に当る。長発は藩命

で東京昌平黌に学び、高崎、千葉の各県庁、大蔵省、東京控訴院等に出仕し、帰郷後は郷土産業の興隆発展に生涯力を傾けた。漢学の造詣がふかく、古くからの伝統的礼法が失なわれるのを憂い、前述の北条や平沼騏一郎らと礼治会を組織し、或いは、花田仲之助らの報徳会を援助するなどして、それらの保存育成に努力した。また鎌倉において今北洪川につき参禅したこともある。以上の点では、後述するように馬左也に対する長発の影響は、兄左都夫と共に大きいものがある。

こうした一族のなかで、最も年少者であった馬左也が東京帝国大学法科大学で政治学を専攻するに至ったのは、上来的た国事や藩政に奔命することを誇りとしてきた、一族に流れる現実的問題への実践的関心の強さ―それは儒教的な経世済民の使命感に通ずるものがある―と、生家実家ともに代々学問を重んじてきた家風の上に捉えることができよう。

注目すべきことは、学問の主流がなお儒教におかれていた明治初年の地方にあって、フランス法学を学んだ兄左都夫と共に、近代的政治学を馬左也が志し得たのは、一つに父の種節自身の、当時としては甚だ開明的な教育方針にあった。彼はわが子の進路を慮って次のように述べている。

…医・舎密（化学）・鉱山等のことを学び候ても一家の活計をたて候位の事にて天下興廢の大事に至っては一課の学にては用立ち

申さず、いづれ諸課に通達せねば相成らず、左都夫事も之より訳書にて三四年専門に医学を修め糊口の道を立て置き、一体の土台は論語を根城と定め補助に洋書の訳書を読破し、万国の事情、古今の沿革等心得候はば固有の胆力次第により太政大臣、参議の任にも堪え申すべしと考え候：

ここには伝統と舶来の折衷された和魂洋才主義と、官途の功名を急ぐ出世主義の明治的発想の典型を見ることができ。種節自身は、これを自分の小国家・旧高鍋藩に対して求めていたのであるが、こうした一族の要望を背後に大学を出た馬左也は、直ちに内務省に入り、のち農商務省の官吏としての道を歩むに至った。ここでの彼は、愛媛県、大阪府の各参事官を歴任し、特許局審判官、法制局参事官等をつとめている。やがて伊庭貞剛にその手腕を見とめられた馬左也は、乞われて明治二十九年三十六歳で住友に入り、以後、理事やがて総理事となって家長を扶け、大正十一年（一九二二）六十二歳で没するまで、住友本社を中心柱となって活躍した。特に別子銅山をはじめ製銅業の発展や植林業、肥料製造の育成に寄与するところが大きかった。また海外を視察して経営の近代化、人材登用にも努力し、晩年には臨時財政経済調査会その他の委員を歴任した。言わば資本主義発達期の日本経済の主流にあって活動した人物である。世俗的評価としては、一応以上のような人物像を描くことができよう。

## 二、禅との関わりあい

さて鈴木馬左也の人間像は、上述のごとき世俗的合理主義に貫ぬかれた近代経営者であったが、同時に彼は、本稿のタイトルに掲げたように真清居士を自認する在家禅者であった。しかも熱心な参禅の鼓吹者であった。

その禅居士としての力量底は、彼の訃を聞いた同じく在家の禅者北条時敬をして、次のように嗟嘆させずにはおかなかった。

大正十一年十二月二十六日の北条の日記によると、

鈴木馬左也氏昨日午前一時死去ノ報アリ、各肝胆ヲ知ルノ一友ヲ失フ、世ニ真人寂莫ヲ感ズル思ヒニ堪ヘズ……<sup>(8)</sup>

北条がいかなる禅者であったかについては、拙稿「北条時敬における人間と禅」を参照されたい。ただ言えることは、北条は生来非常に寡黙な人で、その重厚な人柄は文章においても、内面の感情生活を吐露することは極めて稀であった。

その北条が「各肝胆ヲ知ルノ友」として馬左也を見、その死に接し「真人寂莫ノ思ヒニ堪ヘズ」と記したのは余程のことであり、この文字は本来感傷的文字を好まなかった北条にとっては、まさに万斛の思いを吐露したものと解されねばならない。

北条は安政五年（一八五九）の生まれ、大学では数学を専攻

真清居士・鈴木馬左也の禅的人間像と生涯（松本）

し、馬左也よりも二歳年長者であるが、国泰寺雪門、清見寺真浄、天竜寺滴水、岐阜瑞竜寺禅外、円覚寺洪川などに参禅、見性を評された禅者である。この禅者北条と肝胆あい照らす仲と言われた馬左也の禅体験とは、如何なものであったろうか。

鈴木馬左也が参禅するに至った動機として、二つの側面が考えられる。

(一)人間づくりとしての側面……馬左也は、この面を強く意識し、また意識せざるを得ないような環境にあったと言える。彼の伝記によると、彼の母久子の姪の夫であり、また参禅の同志でもあった河村善益の言として、馬左也参禅の動機につき、次のごとく記されてある。

真ニ邦家ノ為ニ尽スニハ、ドウシテモ平素カラ自己一身ヲ何時デモ抛擲シ得ル丈ノ覚悟ガナクテハナラヌ、ソレニハ何トイッテモ先ヅ生死ノ一大事ヲ脱却シテ居ラネバナラヌトイフノデ、ソコデ禅ニ志サレタ<sup>(9)</sup>

邦家ノ為ニ尽ス……云々とは、今日の常識からみると如何にも時代がかっているが、当時の絶対主義の国家体制の中では、文字どおり国民感情としてこれが生きていた。個人的出世の欲求が国家利益と共存し得た、明治初期の特殊な状況を考慮しなければならぬ。この状況のなかで、修養による人

間形成への願望、つまり修養としての宗教的要求が、一部青年層の間に強く存したことは、既に述べたとおりである。<sup>(10)</sup>

とくに馬左也の場合、彼の父は「胆力次第により……」と我が子の将来に期待している。また養家鈴木家には家訓「おしへ文」なるものがあって家人の生き方を強く規制していた。それは藩校明倫堂の生徒心得や旧高鍋藩士規の家庭版とも言うべき、旧藩時代の実践倫理の強調であり、士人としての自覚の強い馬左也の場合、とくに「人間づくり」の修養を意識せざるを得ない要因として作用したのでなからうか。例えば明治四年、叔父堤長発との連名とは言え、若冠十一歳で旧藩主に対し、今回の廃藩置県により「率土の臣」と相成ったが今後も「伏して願わくは朝廷に差次ぎ御用向相勉め涓埃の報効仕り度存し奉り候」と上申している。

ここには、言う迄もなく封建的主従の觀念や国家意識が濃厚である。しかし注目したいのは、むしろその目的よりも、そのために自己を如何すればよいのか、という自己形成を問う態度が、つよく背後に見られることである。

こうした人格の構造があつて、はじめて河村が先に述べたような馬左也における禅志向の動機が理解されるであろう。この自己形成の修養が突き進められるところ、馬左也は剣・禅一如の立場から、武道を無刀流の山岡鉄舟居士の門に求められている。また茶道、書道、謡曲にも精励した。とくに鉄舟に

ついては、生死を超脱した人物として深く私淑していたと云う。因みに言うと、彼に胆力の修養を説いた父も白隱の『遠羅天釜』に親しみ、上洛中は妙心寺塔頭聖沢院の和尚に参禅していた。また、この父の膝下に馬左也と共にあった次兄左都夫も学生時代から円覚寺の洪川につき参禅していた。左都夫は毅堂居士をゆるされていた。更に馬左也と共に前記上申書を提出した叔父の堤長発も、東京控訴院書記官時代、円覚寺内仏日庵で参禅している。

(二)馬左也をめぐる禅的人間関係の側面……すでに述べたように、馬左也の親族の間には禅による修養を志すものが少くなかった。なかでも兄左都夫が、馬左也を今北洪川に手引したと伝えられていることは重要な点であるが、しかし、このほかに馬左也の周囲には、修学時代・官吏時代・住友時代を通じて多数の禅の仲間があり、これら居士たちの集団が組織的な会合をもって修禅に努めていた。そこには、およそ三つの系譜があるように思われる。

一つは、若年のころ馬左也が金沢の啓明学校普通科に遊学したことによって生じた人脈の系譜である。明治初年の学制変動期にあつて、藩校明倫堂の廃止により鹿児島県医学校に漢学、英語を学んだ馬左也は、そこを退学すると共に宮崎県宮崎学校中等部予科を終え、更に遠く金沢の啓明学校普通科

に入学した。明治九年、十六歳のときである。この日向から加賀への遊学には、前記宮崎学校校長の手引きによると云う。しかし、いずれにしても金沢はいわゆる加賀禅の盛んな地であり、ここで識った北条時敬らの学友は、先述したとおり肝胆あい照らす終世の禅友となった。

二つは、東京在住時代の同志による参禅者の系譜である。これらの中には、金沢時代の延長にあるもの、或いはこれに関連するもの、また大学同期の友人関係者がみられる。たとえば前記北条や姻戚となった河村善益(のち東京控訴院長)、早川千吉郎(金沢県人、のち三井理事、満鉄社長)、小田小覚(前田侯爵家家扶)のほか、平沼騏一郎、(岡山県人、のち総理)沢柳政太郎(長野県人、文部官僚)、花田仲之助(鹿児島県人、陸軍々人、報徳会主幹)などがいた。

三つは、馬左也が住友に入社し総理事として社業に専心する傍ら禅による人格打出を念願し、折々師家を拜請しては社内有念による禅会を催してきた、その系譜である。その成果は懸案の住友専用道場・茶隴山道場の開単となった。この開単式は大正十一年十一月行なわれた。馬左也の晩年を飾るこの道場の開単は、彼の長い参禅生活を締めくくる象徴的なものとなったが、住友部内には、馬左也の恩顧を受けた草鹿丁卯次郎をはじめ参禅に心をよせるものが多く出た。因みに言えば、早逝した馬左也の長男愨太郎も、父の意向を汲んで東

京妙心寺の湘山師について参禅している。

およそ以上の三つの参禅の人脈が馬左也の周囲にあったが、むしろこれは重なり合い関係し合っている。これら居士の集団がどのような禅修行をやったか、とくに二番目の系譜の場合、その消息の一端は次のように北条の日記に覗かれる。

明治二十二年四月二日の円覚寺の接心の模様は、「朝独参後坐禅ス、此ヨリ毎日毎朝夕二回独参あり。朝平山銓太郎氏来山ス、晚ニ鈴木馬左也、平沼騏一郎二氏来山ス、昼並ニ夜坐禅ス」とあり、<sup>(11)</sup>この仲間はその数日前「土岐(註横)、鈴木、品川、平沼、平岡、堤(註馬左也の叔父)氏等十五人ト新富座ノ忠臣蔵、演劇ヲ観ル」のごとき親しい人間関係をもつ。<sup>(12)</sup>この類の記述は、『廓堂片影』の中にしばしば見られる。この人間関係のなかで馬左也は触発され、禅への傾斜を深めて行ったと思われる。そしてその傾斜も、また馬左也らしい傾斜であった。

彼の禅風は「公案の数を誇るのではなく、一つの公案を根本的に徹底して究明し、その見得したものを直ちに実生活に活用するにあつた」と言う。<sup>(13)</sup>

馬左也の大学同期同科の友人早川千吉郎は、明治十九年夏円覚寺正伝庵で、隻手の声を通り、三井理事として財界に入つて後も、同倶楽部の碧巖会で参禅してきた居士であるが、

彼は自ら算盤禅と自称し、「お蔭で此頃は漸く一文銭を三万両に使う方法が判って来たよ<sup>(14)</sup>」と言っている。この「思いはづれた軽業」のような軽妙さは、同じ財界の禅者でありながら馬左也の禅にはみられない。馬左也の居士号真浄は、円覚寺に参禅の折、洪川師より受けたものである。同じ円覚寺参禅の道友、機外・平沼騏一郎は、のち国本社を創立した国家主義者であるが、洪川が遷化するまで十年ほどその会下に参じた。その平沼に『機外清話』<sup>(15)</sup>があるごとく、彼はしばしば道学的な禅談を語っている。司法官としての平沼は「資性穎敏、謹嚴以て身を持し<sup>(16)</sup>」と言われているが、馬左也・真清居士の一見牡牛のような巨体から発する「稚氣に近い天真爛漫・飘逸味<sup>(17)</sup>」の禅的ユーモアは、大学同期・同参の禅友平沼のそれとも異なるものがある。

馬左也の部下として十五年間仕えたという久保無二雄は、その人間像の一斑を物語るエピソードとして次のように述べている。

或る政府高官との会談において交渉が行きづまり、座が白けきったとき、彼は前と全く同じ陳述をしたにもかかわらず、「其ノ態度、語氣、氣分、至極平靜ナモノデアッタ為カ、何時ノ間ニカ忽チニシテ緊張シタ空氣が緩和サレ、興奮した感情モ一掃サレ、白ケタ一座モ平和ナル氣分ニ立帰ッテ話ヲ続ケル様ニナッタ」と言う。久保はこの点を、剣道の極意の

「色ニツクナ」と云うことに関連させて、馬左也の当時の働きは、自然にこの極意を体得しているものかと言っている。そしてそれが「機智トカ頓智トカ、又考ヘテシタ様ナモノデナク、天真流露自然ノママノ表現トシカ見エナカタ」といい、「一座ノ氣分ヲ支配スル」ことは「役者が優レテ居ナイト出来ル芸デハナイ<sup>(18)</sup>」と述べている。それは誠実な正攻法の生き方であり、この点について、彼の伝記は、一木喜徳郎の言として「機敏というよりも、重厚にして然諾を重んじ信頼すべき人<sup>(19)</sup>」と言っているか、この人柄そのままが、馬左也における禅に取り組む態度であるとも言えよう。明治二十二年四月二十五日の北条の日記には、「鈴木氏ニ月桂寺接心費用支弁ノ為メ金参拾円ヲ貸ス」とあるように、馬左也は北条と共に接心会推進の幹事役を自任していたと思われる。黙々の廓堂・北条と、重厚の真浄・馬左也との「肝胆合照らす」仲は、こうした禅の実践によって深められたと言えよう。

参禅によって見得したものを真ちに実生活に生かそうとする馬左也の禅風は、彼が住友本社に入って財界人としての地位を確立するに及び、この傾向は益々強くなった。住友本社での接心会では「自分は禅の専門家ではないから多くの公案をみる必要はない。ただ財界人として仕事をする上での真知、つまり信念と力を得たいのだ」と言っている。この接心会は明治三十七年のころから、京都大徳寺管長広州老師を請



して毎月行なわれたが、同師遷化後は、興津清見寺の真浄、博多聖福寺の東瀛、京都妙心寺湘山の各師にひきつがれた。

この大阪住友時代以前の馬左也の参禅の師には、初期の洪川、鉄舟居士のほか滴水・峨山などの各師がいた。若年のころの洪川、鉄舟への傾陶私淑については言うまでもない。

彼は、禅学の話をする毎に、蒼竜窟（洪川）のことを回想したという。しかし後年、清見寺真浄への信頼も深いものがあった。

当時侍者として真浄師に仕えていた朝比奈宗源によると、同師が住友の接心会に出た第一回は明治四十四年の三月と言われ、以後毎年二回遷化する大正三年まで続いた。

潜竜室宗詮坂上真浄は天保十三年生れ、妙心寺越溪の秘蘊を究めて明治十九年清見寺に晋山し、四十一年には妙心寺に視察し、四十四年当時は臨済大学々長の要職にあった。禅僧としては新しい時代感覚をもち、馬左也との対話には、時局や事業上の問題をも交えて尽きるところをしらなかつたと朝比奈は回想している。<sup>(20)</sup>

真浄師の推薦によってその後を受けたのが聖福寺の汲古室竜淵東瀛師であるが、はるばる博多から招かれたのも、一にその禅定力を馬左也が評価したからに外ならない。当時隠侍として随行した白水敬山によると、接心は大阪寺町の法雲寺を借りて行なわれ、二十名ほどが夕方来山して坐禅し、講話

真清居士・鈴木馬左也の禅的人間像と生涯（松本）

をきくという形式をとったらしい。大正十年春、馬左也は脳溢血で倒れ左半身不随となるが、この病床にあっても「方寸を乱れ不申候。煩悶苦惱には陥らざりしと覚え申候。修業は為さざりしに優る万々と自覚し、諸老師の高恩感泣致候。御同様死るまで益奮励肝要と存候」<sup>(21)</sup>（書簡）とのべている。病床にて大慧の発願文を誦していたが、「安住正念」の境地には到り得たが「自在捨了此身」の洒落な意味については、とうてい未だしであると述べた<sup>(22)</sup>と言う。この年完成した茶隴山道場の開単式は十一月十九日妙心寺の柏蔭軒池上湘山を導師として行なわれた。馬左也は病軀をおして出席、ひきつづき月末まで提唱をきいて参禅した。しかし翌十二月十二日再び発病して倒れ、同月二十四日六十二歳の世寿で不帰の客となった。この彼の死が、同じく病に倒れて危地を脱し、愁眉をひらいたばかりの北条をして「寂莫ヲ感ズル思ヒニ堪ヘズ」と歎かしめたことは先に述べた。

葬儀は住友合資会社葬をもって行なわれ、秉炬の導師妙心寺湘山を請し、古川大航、西山宗徹、朝比奈宗源ほか多数の僧侶によって営弁された。琢心院殿廓照真清大居士が彼の戒名であり、いかにも禅者らしいが、遺体は郷里の高鍋に運ばれ、生家のしきたりにより改めて神葬祭で埋葬されている。

馬左也は自らも禅者として生きることが任じ、晩年は教育

や社会事業等の利他の生き方を望んでいたが、経済人としての現実的合理主義があくまでも基本の姿勢である。

大航和尚より話之原宿の松蔭寺の事は百五十円増加寄付差支無之候得共、其土地の人が特志者の尽力を無視し、之に乗じて其利を謀る様にては好結果は挙げられぬと心付候故、今後の措置に付ては手控へに致度と存候<sup>(23)</sup>

これは荒廃した白隠禪師の墓所を整備するために周辺の土地を買収して寄附しようとしたとき、海外から妻安子宛に送った書簡の一節である。一見、金を惜しむかのように思われるが、国家社会の福利に役立つと思うことには、思いきった出費を辞しなかった。一例をあげれば住友が社会奉仕事業の一つとして協力した大阪府立図書館の寄附、住友職工養成所の設立、住友病院の充実などには、馬左也の蔭の力が少なくないと言われている。とくに東北大学鉄鋼研究所への協力、人心開発のための報徳会への援助には、馬左也の禅友、比条（当時東北大学総長）や花田仲之助に対する個人的友情を強くみる事ができる。そのほか彼は教化事業にも手をそめ、時弊を救うべき良書の刊行を企てた。『臨濟録』の校合出版を意図したのも、その一つである。これらを批判的にみれば、旧保守道徳の鼓吹とも、体制内労働力の強化とも言うことはできよう。確かに馬左也は、資本主義興隆期の日本経済界のエリートである。その点では彼の思想や行動に限界があり、批

判し克服されねばならぬものがある。しかし彼は、旧日本の観値観の中に生きた人間である。その枠内での一個の人間として捉えるならば、たとえ経済的エリートとは言え、人間であることに変わりはなく、この一個の人間と宗教とが、如何なる関わり方で働いていたか、きわめて興味ふかい点である。

註

- (1) 駒沢大学仏教学部論集第九号所収
- (2) 「廓堂・寸心・晃水―比較宗教学人間学的位相―」比較思想研究第九号所収
- (3) 「明治宗教史の側面」『日本的宗教心の展開』大明堂一九八〇所収
- (4) 『鈴木馬左也』住友本社内鈴木馬左也翁伝記編纂会一九六  
一（以下、『伝』と略称）三七頁。本稿は、資料の上で同書に負うところがきわめて多い。
- (5) 『伝』四頁
- (6) 秋月左都夫
- (7) 『伝』一二頁
- (8) 『廓堂片影』日本教育会一九三一
- (9) 『伝』三一頁
- (10) 「明治宗教史の側面」
- (11) 『廓堂片影』
- (12) 同明治二三年三月三十一日、日記
- (13) 『伝』三一五頁

- (14) 『名土禪』柳枝軒書店、明治四三年
- (15) 『機外清話』財団法人修養団、一九三九
- (16) 『平沼騏一郎回顧録』同編纂委員会一九五五、一頁
- (17) 『伝』三四一頁
- (18) 同前
- (19) 『伝』五〇九頁
- (20) 『伝』五七二頁
- (21) 『伝』三七二頁
- (22) 同前
- (23) 『伝』四六八頁